

現代民俗学会年次大会シンポジウム

政治・世相・公民の 民俗学

平成二三年五月二日 土曜日
午後一時三〇分開始予定

於 成城大学

発表者

大塚英志

室井康成

コメンテーター

菊地 暁

コ―ディネーター

室井康成

門田岳久

主催 現代民俗学会

室井 康成 (東京大学)

『文明の政治』の地平へ

— 福沢諭吉・伊藤博文・柳田国男

大塚 英志 (神戸芸術工科大学)

『公民の民俗学』は可能か

コメント

菊地 暁 (京都大学)

趣旨

1990年代半ばに「民俗学斜陽論」を示されて以来、民俗学界では調査すべき「民俗」の消滅であるとか、民俗学に対する社会的需要の減少といったことを嘆く声が多く聞かれるようになりましたが、そうした悲観的言説が説得力をもつ一方、マスメディアや一部の研究者の活動によって、近年の民俗学はあたかも過去の世界への憧憬を誘う語り部のごとく奇妙な存在感を発揮しています。しかし限りなく静的で歴史的な存在である「民俗」を審美化し、現在の日本社会を覆う表層的・ロマン主義的な伝統志向を学問的立場から補完することは、「眼前の疑問」に応えるというリアリズムを持った草創期の民俗学者の志とは、対極の方向を向いていると言わざるを得ません。

「眼前の事実」と言っても一様ではありませんが、貧困・自殺・格差社会・国際紛争など今日でもニュースとして流れる社会的現実—それは世相と呼んでも良いでしょう—は、草創期の民俗学において重要な研究対象でした。それらは概して「政治」により結果を来たした事象であるとも言え、その意味においては、当初の民俗学研究は、同時に政治研究であったとも言えます。民俗学の耐用年数の超過を嘆く論者は、しばしば民俗学のアカデミズム化の過程にその有用性の衰退の要因を求めますが、それは単にアカデミズムに組み込まれたことよりも、現実社会の世相や「政治」と向き合う努力を忘却したからではないでしょうか。

このような課題に取り組むには、「政治」に対する眼差しを取り戻すことで、現代社会に対する民俗学のアクチュアリティを高めることが必要であると考えられます。そこで本シンポジウムでは、世相や社会思想を分析する科学としての民俗学、現実政治に取り組む実践的分野としての民俗学という、戦後の民俗学界では半ば忘却された民俗学の姿を、学史や発表者の実践の中から探ることを試みます。

登壇者として、『公民の民俗学』をはじめとした著作で、柳田国男・千葉徳爾などの思想から政策科学としての民俗学という視点を再考し、近年では戦後日本における民主主義や憲法の問題に取り組んできた大塚英志氏と、『柳田国男の民俗学構想』などの著作を通し、初期民俗学が、大正デモクラシーや普通選挙法施行と連動する形で、事大主義を払拭し自律した考えを持つことのできる「公民」を養成するために構築された、との見解を示す室井康成氏、更にコメンテーターとして、『柳田国男と民俗学の近代』において民俗学的営為の持つ政治性や思想的背景を明らかにしてきた菊地暁氏を迎え、「政治と民俗学」の可能性について議論を行いたいと思います。

本企画は現代民俗学会の年次大会における催事であり、午前十時より研究報告と会員総会を順次開催します。参加申し込み不要・参加費無用。会員内外の多くの方のご参加を歓迎します。

現代民俗学会 <http://gendaiminzoku.com>
お問い合わせ mail@gendaiminzoku.com